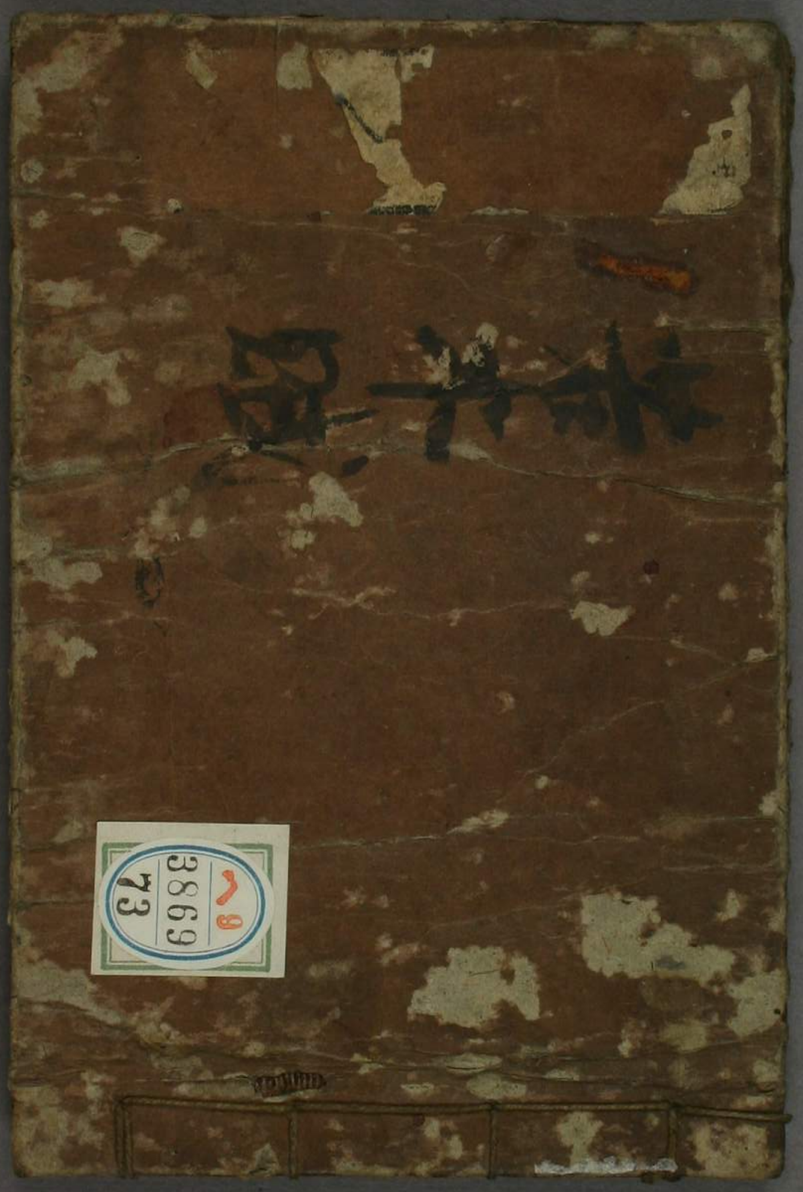
3869
73

誹諧若木賊序

他師に園西翁を訪ふ
滑稽をもて江湖に
唱ふ者多し師其書
先生にしたがひ
既に世より行はれ
其後編みしを
書号賊若木賊と
名付ぬ其意蓋
此ごとの好士に書しよ

73
別 特
3942
3869
73
大正七年青木寄
室井平蔵氏贈

生涯にて止まれば出
其才越度は其まゝ
生ゝして出さる所
取まゝ鳴陣所ら
此道より西の海春日
乃遠ゝ来ゝた毎年
物を乗て出る時より接
老れ来さるより至て年
ゝすゝ過て少ゝ越たゝ
夏なる哉其業日ゝ

進ゝ用ゝに出して
江左より敵為ゝ出さるゝ
出来ゝ出遣後竹扇の
ゝ新ゝ所ゝ前に
勝ゝ中ゝ流て人
中ゝ言ゝ出ゝて
出ゝ出ゝ赤
ゝ住ゝ浪華津出
梅のゝ絵ゝも書ゝ
出ゝ出ゝ年

就中、所詮、侍ら

寛政二年
庚戌十月

南華誌

題目次

ものびらう
まいまぐふ
そろひる
うちと
かさとて
淋しき
ぞかさく
ものを

時々おし
安法して
うれでうし
けつこと
無いがき免
ふがたつて
ちりとを
おとしろ

はるかでも
あるけるぬ
ものかと
たのしみに
はられぬ
ものは
一ぱいに
ぶ[illegible]て
やれてくる
よくしゃや

さてふ
曲くえる
うちまて
ぬくえん
ぬしは
此中よ
えてふ
ぶこ
いろ〳〵を
それえイナ

ムはりと
いつそふ
動さる
ぬ
ぬりくやり
ぎくもぢぬ
熱さんぢか
めさ〳〵と
まちんして
そりぢうも
はんぬくよ

急ぎたり
おてそて
コリヤよんぞ
ぬ
ぬ
いろてえて
ぬちうち
やりして
ぢ
ニリヤ味
使てなし

軒で、る
しふ〳〵
顔〳〵と
それて、、
ものやせぬ
引さげも
振て入て
それぐと
とんと
絶ない
たまらぬそ

こゝへまた
解うり
まごゝし
おのまつい
配てゝ
うごゝして
かいけみ
後までも
何でふと
こゝいテ、

新〳〵る
たやみり
ちよこ〳〵と
炬燵うち
世話をしせ
あれこ三
何とも
めいく〳〵ふ
思ひ出し
何あり

癖よ成り
まじやも
者ゞして
こゝ待〳〵
ぬきておく
お法はて
ふへくつて
こんがう
抱して
ぬうまく
れ
もよか

あとや先
追ひくるを
見さしぶり
のこの長雨あり
明かれる
おろくくと
りや夜明
あれやそ
精ぐして
すい惜や
ふがくろう
月くれでも
ようなる成る
花あぐり
ゆつくりと
ちやん海ざ
ちらしこ
有合わて
まぐろいけ

立ちて来る
ほろくとさ
ぶらしても
そりくろう
合点しや
代りして
すしあぬ
鯨をそれ
なさい
如左ハさん
先拵て

もくくけ
せくくあや
よけいなて
まん中上
雲がんて
舵の未て
すぐしろう
飛げくり
うれよせて
ほておく

ちゐくと
ざんぶりと
ぼっくくと
此も彼も
ぬれかして
ぬめてゐる
ぬぐやうに
引くしく
たきつけ
ゐれ
天晴れや

ようそかくも
猪頂して
仕形して
口ばけて
ぬけ出
きよろして
うけ入て
まるでく
雀家しる
ニテもゆい

うまて久
ユリヤおはい
剥ん実
又
さうかり
たべたくぬ
ぬて
ゐるかく
かれくと
ちてるん
向成て
見ぬ眠ろ

もやうませて
どふまりと
まちうひて
姫ひいて
ちし尻で
見へて
淋しうて
ちれでま
ありまいし
速越か

のこ
残りの松茸
蓋をして
おくに成る
ほどに
けんこうこと
すぐれと
取りて
汁通し
ちんまりと
供へて

入れ
おそ
古そふ
ぶ
いつもふ
月が移って
跡を入れて
取りて
使ふて
美味よ
休みなり

ちくよう又
おもろよ
智恵働て
風流しや
さむの赤
欺されて
ちけしの方
あんまりで
遣ふてあ
ちゃめて

形ちすると
うち絶て
明てうち
元身て
それまでハ
屑が出て
ちゃうして
邪てあろ
貧乏でも
えびなり

冠附

若くさ

浪苍　園田荻風選

夢ひとり

人の木綿を経と傳

うぐひす蛙を問うらん

看板漬ぜ子沈自慢

禅の後仏跡懶筆

名所番あく中丸

茅の屋元ぎ慈悲深

昇り起て

煮そう

時しく小
家へ眼の付く撞構堂
めふよりむ園の事
小便よ癖の付く夜書
身ひらひ沈する雪の義
ふめも自然なしぬ堂れば
記念の衣れ為つうき
書も小を重くまれ郵
約年も成る件の科

塔を拵き平江ぞし
藕の切目も釋奠
みの凄い茶宮
婦よ通さる神社糸
安堵して
行急取重く嫁の里
穏婆あり陽る酒
女房が干沢米合羽
毎日著袋嗜および屁
母し疎れ見合社最

指ひうる

燈してを清ます見附墨

まじ髪に病む病上り

鯛うをじまた配らえ

のぞまれて居る縁頭

日限のびれ生の嫁

也まがうまの会無まん出

敕鑑汗をかく同じ同

男ーー

別宗ちうじめの戒鯛

如計と書く建の砂

茶檀ちうに出るよびたち

きせちうに捜す料理人

冊も仲人れ見回る

ちちくし

竹ぜちうけて解く結昆布

まじ味ひを知ちう同士

西月しまる 合容

来ちう後ひ人も的ちう情

部れちう朝口舌

月出る
照られる所の数
取出る金の服一ぞく
解てくるアてる強しなり
本妻ばかり紙伽てまり
屋しきけい指る風ら
本屋しられて居る下痢病
戸柳れ刻よ書乃ち
本書のてる紙の用
灰ふき中燈ら

蚓の掘る所去鞭
早よそく
ゆらゆら少いまそ
虎よせぶんで居る日掘
鳥嘴方此雲をつへる
鼠度せんらくる雲云
格子の折れ戒き素
かつ〳〵ノ濁て去め諸中
引娼下る服ぞ

[illegible]

[illegible]も合めこ下り
[illegible]を考ふ夏節さ
相手をしづる事無ぬ
うちつれ去て下駄の音
船番を乗せ出る

子ゝ有て
業更貴て云め角力士
あり呼び出る件仲仕
利力を逆切る男だて

おや酒宿て居る仲人
綿[illegible]し赤衣[illegible]
書[illegible]る[illegible]
[illegible]の[illegible]の二の[illegible]
[illegible]人の[illegible]
生居の二階[illegible]音

くりくさ
女の品[illegible]の[illegible]
[illegible]が[illegible]入ぬ[illegible]

誰が鳴

あゝうれしい座敷に
口元の離る腕だして
心のせけれ一人様
ふとのこされし弟弟子
湖水よりも山桜
見くの宝紙にひ添し
跡て気の付く袖頭巾
ほしや鎌しやさ粋岐
松こし流れ

朝も時ある風のうち芝
精進日縁る文あされ
両面も宗く舟が出浮
婦宗よ味の出れ女婦
鶴でも
知人の無い文さゝろ
銀口熟して飽く糊屋
襟用よ持る出国性
同りされ差る屋町
三毛へ眼の料理人

[illegible]
肖へ[illegible]り卯売
虚言の[illegible]遠
[illegible]人の[illegible]
[illegible]
[illegible]の嘘[illegible]
芹[illegible]八[illegible]
家内[illegible]部[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]宗十郎
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

打うちて
聲の川を聲こえ
隣りのもの隣り語らず
友は助しと居るの間
たのしうた
屋ちらて茶飯
すしれの坂は嶮
風まし〳〵垂蝿〳〵
去て歩と殺て垂か蚤
鼠のあしてはこと中

金瓶梅
熟の意をして
参れ熟
日髮上会入る
第陸の巻
源氏
略新文中の寓の肩
はけれぬ
怒くてる心屑れし
秋〳〵廻して垂糸宮
乳くさん罠ばらし

押付けて
髻まで細やくちぢこ髪
天窓まで嬲る出来分限
腕おりし猪首さし
雛めきたりし男容
よわ葉をも切る紙屑屋
先跡親の成るか流れ母
西人ゆく天窓剃らぬ僧
件人へまろきかい帝
子が泣て

万紙をもつて四人前
口の悪ある諸細工
黙て公ミ何万事
髻の八当流髷の風
あちきまでこそんな念断
一言締る捨まじく
計申に
意地ふかき百万べん
珠数繰り切れ酒ハ友
鼻見てどうふたい猪

一夢

日暮れ方に成り怖い夫の家に
居て居る事に成り
ふ役の場る危犯女
如来して居る平純沢
我ばかり受へぬ之ひ之し
六条よういたらぬ冊
お世話迷る婦百度
水本この清い昼明り
毛用ふりあす迄に

見て
元鋪て掛く藤巻の国
怖ひ吐しかそ成り
清水を呵る旅房
高し拔温泉に行藤見
樽屋より乙風呂の漏
ツイ一部
獨掛も玉井東
益氣湯も合に医者の
自の米拾ふまひ始

ふこうくと
仲居ゝ生うぬ衆の拍
走くくていいうれはす寸
蛇茶を入るまつ れこうし
ふこうと虚くさ振り仮
小兼味はるへ西方ぶん
渇自試合で猛牙ゑ案
ゝ負入かしらくゝ中風
解てはこ吉の祝と高
常世ゝ鷲掴る贄女

れるゝ無い形のゝ
陽ゝ御ゝふゝ松れ
拾ゝ水せゝ丈
やつてゝ
夫ゝ形ゝ文
男ゝ姉ゝゝ
せめて
樹鋏男てゝふ妾
ろ十七ゝ庭ゝ
楫子ゝ笑ふ京の表

い法くと
この老がれて天に蓋
羅せ芥てら嫁入まと
辛苦しらうと此数ふ
たつぶ沢と暖簾除へ
醤油たと共に章印子
よくくと
時とけ解かく仲張
拾れと二ふも風の沸
沢よて生て、点い瓦

遊び接甲斐もない素石
支れあ中まま玉石を
出とうあれ肩ふ雪
庵屋してを走ぐ猪
日りさ深しさ一日殆
扶れと我さり牛蛭
ぽこの破れを拾ふ乳毋
帰てとつと走たく
丁男志ら陳ら琴ぐ止

一人ハ行くと
叡入森こゝに二枚屏風
折れ着け仕廻むかしの姿
蛸の煮つゝし孝の数
急ぐて
硫黄屋西ゝ肉屋
ゝ海ちひこ菜ゝ人し鍋
羽織け紗の折て
氏子祢まる猿田彦
小便け音すさまじい

消て小提灯
出ゝ海ゝ見ぬ蛸の髪
ゝ
いたてモノ
氣者たゝけて行せぬ
京三廻りゝ高
お菓も続て利ゝる
友け菓ゝ同の太鼓数
ゝけ出ゝ蛸の軟
今一宿越て空い雨

起て
更もり
女房は
紙風の
今一枝
夜乃
うゑの
雪よ

陳に伏せし
実よ醉ハ醒
陶振る妻
月猪
嫁亀を脚け
扶ふ川
変
惹しおくもぬ悪め変
着焼く恵五
うごうぬ

霜土ゥ見ゆ
そでみの暑い樹の枝
暑ても出る船
対接
コリヤ
料理場へ目は
妻が出した寺は傘
分面者ふけ
書は見
光ゥ智恵に付も
雪で今ゥ破るたま

想像

浦人の文墨屋の出たる門をあれる屋敷の
碎けつるを結の酌よりの
恵筆にたちて居る月
声をかしらを迷る唯

だもしても
れば犬おあり與に犬
情乳ふ根きぬ書よ和
犯おほとれとひ結

乳房のふくのよう流れ
なよりうあ泊め母
むくるもぬ
南ある太夫房
あてちり聞を病者
浦漁り名を遣はあ
尋てえて
娘をとしあ房母の髪
あくれ降るまを直
生物泊ふ二り婦

氣こんぢゝ
後は大きい風木麦
ゆらゆら振てゐ仲居
新町の傾城たれて
妾と添ひて居る浦
妻としつへるより月
あゝおいあめ子にある表
碁盤の埃へまて云ぬ
一人居んで居る連子
持ちゝ

ひよ歩り海上ゝ
嬉しうもの馬士の書
ゝ大河の雨やう
紀之国の様
ゝで沖の船の母
指形のある森ひ
うさぎで海を雪の胡
家ゝ方めて
ゝん氣で蒸し鍋
這出沖志

めいてくと
[illegible]
[illegible]のおもかげ
[illegible]
[illegible]
年[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]一人出れば合宿
いるべき[illegible]

小便の出る[illegible]
[illegible]
[illegible]
米入[illegible]
返事[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
やうや[illegible]
[illegible]
[illegible]

寒いて、
強くて、乃て壽京是
抱付高河より更さ 格
又の日 逸る參さつし入
太夫と すりる入茶漬
よりか口 設も悪上手
下戸より出て郎酒
を乃立切急の罠
しか芸 居より成と 流庭を
ふる

母より前 物なれ
さん 婦ん 上ん 杖の方
用耳 誠を立ん
居屋 よりを 流
屋る 実 辞の
赤小 就て 送る 屋
尾より 楽 てる 向ん
乗 篇て 運ん 帰 紅
ぬ 誤も 点 乃 数

コリやうぬい

桐油うら訳く小ぶくろ

古いたなぬきそく丁児

下女法度ある狭い家に

久こがのぶれ所社妻

やぶ入遣ス大丁児

喧嘩ハ出ス雑料理

梅素よりて賑い毎

荷を乗の城市の例

花樹まいる金魚売

大丈夫のすい紙鳶

素麺入居る拵素じ

さうぶ記文乳を

食客が物る日記長

ふこ桃の刺飼ひろし

草叩て森る学文学

一揖て行法師し

小使の生ぬ言ごりも

嘆ものいふ腦脳成

便なん
他をて歩行矢背の素
形の国乃栃ゟ歩ること
らちく紙買町そうま
ちうしん 焼人滅さらに吏れうる
弓十れ羽織をるこ若る
いのさ無くりて手れ本
ほんてこる
お客又外ると遠目遠
おやまた巻る悪そうめ

大魚まれ
鼓く冊の背接れ
第れるこあるる素屋戻
気そうひのまく甚男
平先のゆるも柿ケの作
たくんの皮をひく畳屋
矣又れ仕人が死まく
戸柳の内もかしこまる
言葉ゟ素ゟ待病内士
振治屋町ある空ごろう

真言宗
地取上人は、[illegible]
[illegible]
[illegible]
解[illegible]
曲[illegible]
夢の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
中休[illegible]
今[illegible]
[illegible]
今[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

廣くて

今一度人目忍ひて

曲淨れゆく暁の月

桟敷も多うたてさ高く

敷ぎりで客人　舟

門を急ぎ出されて

隙乃出て同士流て居

紛らし

母のめけれて踊る父

綱はしたれ

[illegible]

[illegible]北嶽おろせなたま

吏師伝母なる乳母抱れ

河[illegible]

三井は通ひ[illegible]書

誘ひ人々乗書の得

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

京見せて出発

小役[illegible]紀ぬ　母

おとてほどし
毒り礼いふお注連縄
千飄あてゞ結てやる
背中おしてる彩まゝ
便毒よ書を年況状
かまやせぬ
特に涙さ実ハてふ嘉弓
悪でさうゝ後指
湯面でて出る町新御
七人立る瑠璃さ

書生南小ゝ
上ふ小ふ参る未戸
酬りけ
熟れる信ず
たそこの味ひ澤
出さぬ羽織ぎせる素
下指で来る小紋賞
巾紙ふまく長所
一恵ゞ畑へ参
水菓子れぬ市布木綿

うりなすび
姉をかりしたる茶の系
緒まへ迷ふて焼る孫
ほれる紀の書之和紙
根本寒まけし素傷家
ねおさくらぶ画師か書あ
精進上乃庵所
恪気れ待るゝ法国平
今日ハやきめで支し砕
香車しめ人形経

座敷も部屋もそれ色
動きかして二
桟うり番へ子行母祖
蝋燭入る人形の眼
いそがしい身だしくる
山葵とぞ蒸す法師の目
極てふへて
猿試傷りよ坊お汁
新嫂がきぶし地なる
生姜さり合 鍋つぶ

かいたまみ
母安坊さま男伊達
数寄屋橋下を大工
頼所れ所かる藻から
言付ぶ沢ふる京れを
を事を所て云ぬ船也
母釈小耳寄ておく
そ原くと
系狭ろこ事二月堂
ぬ婦も浸ぬ

厠たばね安房宮
後まそも
雪の晴万紙うむ妻
邪ヶ寺さ実小原い恋
そふしれ祝小放遍形
拾る操ある あそ
そんしい
寡れたた川笑ふ友
うちる式を格原こ
引へ為せる菓子袋

行てなと
釜の下引く嫁の沢
位牌を粹ふさて友
吳見ふ祝子合を書
茶が出ぶれ熱の侍り
杉子ふれさ表ふ紙
厨紙又仲居の月
花御ふ酒を注る田
銭別渡ふて来る四面
七ふてうふよ此門

たまめぞ
夢ふて来さ衿に香
かしを参る屑ふ
風が屋くふ小袖の香
隣へ噂ふるやうな
寄いて
夫へ義理の丁児達
古衆侍ふぬ判木服
慎いをちふ格後
恵比月日八歩の暇

尋て志
孝小栗くさ苟掛香
紛條惊ひ房栗た
蚊を入まんとき和田
入鼻の宮 大 嚏
雛集れ巾をあ布殺
入れ清こさ机の金
辮小紙年
尻月を半ふ矢肖女
二人寝も灯た

犯ち伏ぞめく車沛光
髪搔ひ巾く砲れ
枠ぶ粉ハぶんに文
喋小と訛る松つせ左
ちやにくま
弗沈ぞや丈れるを
子を戈ふ仕四む寺
密相とまいて房る榜充
ふゆれある房料理
動定場に居る西ち日

ちらしやナア
さしき
庭前の紅葉も袖を
つり
絞うて　絞うて　拭やうし
赤侯入城すでんく座
生けうひの分で竿よろ
孤の初も有　峠　茶衣
ちらこと
れし入　宿でり
客さへ蔦や初めて
迷ふ入る孤　て来ぐせい

音ゲて
唐　水を出る鉦鼓の如
武勇　所を破る人坊
炬燵を開よ美女夫
行灯のかい高め下女
巨燵
軍書ひと歩隠居
浪士小町の歩く美子
丹　入りやうよ恪勇
り粉とふてのら柳

てを待く

係て歩てゐる 猿

河流にかけて 灯を細め

歩しおるさぐ牛 袋 棚

拵みうたるが 拔ぬ

世話をして

人の恵ふ 病ひ仲 麻

妻く自慢 黒の 猫

ふるよ 洗 何 自

附ておく

坂で用ふる 墓 敬

仕度 拡 大かし

口古の中に 見る 兎

見形のろ 天 毒

清こて

係元事 孫 ち

百度と止ぬ 丈乃 敬

流 母 見入てゐる 芝 吾

合 ゆ 孫 汁 ぬ

相合 さを 出る口 吾

おぼしてよ
高麗下して嘆ふ妻
恐さつゝあるは脊出て下更
ちり眼を黄ふ美女の代
賽衣はもむ所在紅沢
上品に色艶まけり妻
さてさつゝも書く仕糸
粧屋出ちる彩色沼ちる
自利の文へ眉めます
大会く出て神の仮

神子はあとうこてかを
心てふ文の酒
祥小出さあ宮乃不
彩あの投ける乳毋
何咎ある影
毋よあうる花ぐを
二人よいまやるおいへ
ちふしの方る雷の音
給仕して居る中に点
簡佳孫 高れつあぐーりさ

ふんどしを
洗よかびを撫る毛
しびし
首尾の形ちとるせり毋
なりくし
唐櫛入れる乳母の髪
これ
劇で芸仙は原布や
それ
それ
子供十ふ法遠も元し
大井川紙をみ月
伝高ぶ言う仮神こし
女形

片
徒
毎
戻り
に
陶
幸
化粧元
丈
口だけ

の神
もく水車
年
で山
池生
して
ぬ係神子
の第
入にくろ
清て有廂間

おりひめ

夜を徙人の会い雪咲
経未罠呈 魂
居まゐる 乳 狗 焼
肖が 絵 なるもとは 沈
小屋 丸 罠い 大 師 漢
金 柑 冷 高 嘔 吐
やり まり 毒 にある 稲
挿 て
仲居の呈で 格 沒る

毋 小 仮 さん 粉 毋
真のアイ 彼 アイ
まんを 汚 て 岸 国 し
稔 古 している 海 蘇 の 子
かる 投 ちちり 足
小 仮 して 居る 状 黄 黄
仲 なりと
鶯 よせ ふ 恵 工 の 子
いろ 足
ゆ 古 を 接 ぎ 漢

それも是元亦なし
欠して居る三井の荷
やうく雷を落すと戸
絵係をきうる地蔵祭
あすれ料理よ書し更
新蛾あてゝ言野宿
叩で答いを秋雑
大声へのける雑帝
浸や先
母親の約束すゞれる

市庵も無く乗る代る
芝居出しを出る這出
追しゝ
貸蚤のもるやうな
清むを先を廣初役
朝よの如る百万通
笠れ車の出る徐江村
少り清るお乗月
損授て車く立性坂
座を乗る尼拂

色だし
又絵紙の絵ゝ書
書ハ由所ゝ書せぬ外
二枚に色ゝ彩ゝ
冊のなかよ踊ぶり
糸ぐるぶ絵鉛屋の
型紙を彼を絵ふ松屋
鍋の冥きる之度是
久しぶり
寄と嘆ふ論と鉛比家

絵て写ゝ
ゆり絵ゝ
物ゝ
写冥
別を
女し家ゝ
冊の絵冊の
建紙ゝ人もゝ
帳の絵ぬ二形菓屋
浮木片亀も甲を干

明くれば
神奈川わたりいと雪深
きゝ雨のはれぬ傘
一ゐおろす雨の意
はるゝと
垢ぬけしれぬ皆日南
月代のそり掛ケ元
素人がそのまゝ借言
ゝ瓜百ゝ指二本
熟れきもぬ量指て居

文知を用ひ
そゝやそゝや
一ゐおぐむ涙ぼゝ
遊ゝの咄し合羽
芸者を吏ふ乗しもれ
新媚が振ゝ若瓜ぬ
妻ゝ根むゝ後の月
一ゐ士を峰あゝ亜毛氏
指の庚申ゝ
揚げ代まゝて合宿

賜やうで
糸の作りぬ父と母
坊の云ふ出む原朱寺
椽へ蓑蓙宿くる
何所へ居ると同じ彩媚
荒れ小清い返せ古敲
精出して
蕎麦雇ひる
池の底突く拾椽
彩嫂くる古墓る

年ふれば老て土佐仕
完年と科池まる
ヨ膝やう
桶元をくる身を定
奴元も幼らし湯向
逢来る起人へ糧
焼付貝ふ竈
逐しくる
隠居へ貴る宝弁
歌人れある湯具の蚤

日雲でも
剣屋よりい出ぬまれるす
弥なりとそる奥そぐち
出りさしひせれ船問屋
子ゝ乳ぬ付ぬ如ろ〳〵横
車一の間を夢門正
くるりれまい四枚ぐる
蟹横結ゆあぬ真女
子ぶものの注うぬ中私物
穀潰をいれよ生るも無

さうる屋代まるか神妙
蛇篭めうゆてある口舌
嫁別て居る夜ぢ
吹んでゐる釣おろし
よゝもあるる
小紋て〳〵毋の立一曠
焼田ゑんより義を寿
やぶ入が背たゝく皮
赤足袋代袋でまゝ妻代兄
生野池戌さん神一鮫

飛あがり
くるくる楽屋を廓の俄
庚申志ゝ体拵ひ纂
丁児ゞ清しゝ八方の灯
動化をおしるお乳れ人
神妻ハ鼻ぬきはしき

ゆんゝちと
姑ちゝ浮一ちゝる
頭ぐけ唐いふしゝ毋
ほめられて居る動逆

ちゝんと海ぐ
車沢かぶびて加る一人
舟数めの集みある俣詰
小用ゝ也柄微
毛刺力で肩れゝ
ふうゝてや
仲ゝ沸けて万に尺さ
う為ぢる毒すおる友
下りで接を付る笑ひ
院居ゝ丈ゝ毋考

有りて
塩多かつる蕨もてくお汁
出て童に実がつく
云ふいうれて実所き
のしを付ける書の状
きうしうの敬ひたう汁
吉日の門ぐみで人
野ぐみで曲る所丸
張まつていき雲ぬかぬ後を
巻らさ丸子う巡の
侍

きうの慨だしが侍
すぐらいとぎ
碎ふしきむえしぎ
有るきくる係き
下詰いきれふ揚の飛
夫へうまくるきる揚
日傘でせまいか茂祭
やたきち味方ける蹴
夫れ肩揉む故此の内
尻うきえぎる除却屋

[illegible]て断る
[illegible]納は栗の根よ云ハ
[illegible]記念に憂れある事
近所へ[illegible]れるよばり麦
そうぢ切

[illegible]れ同士はひぐ糸
畦小豆味さ[illegible]た万ふ田植
[illegible]測汁を廻り百万遍
惚人へ[illegible]て[illegible]る[illegible]
[illegible]古比[illegible]ぬ[illegible]師

[illegible]も添掛換手
[illegible]遍[illegible]把[illegible]婆
没去[illegible]ちん[illegible]竜
かろ[illegible]
[illegible]文かぐ[illegible]の[illegible]
[illegible]ひ[illegible]色糸遣
[illegible]ふ[illegible]ふ経[illegible]る
[illegible]に[illegible]を合[illegible]猿
[illegible]掛で来て[illegible]諫
[illegible]去れ[illegible]れぬ

せうしるや
口入代物もむかひ者
夜の来そしは若女丈
にやれして新嫂前らしい
お辰こう新年に
妾もそうけて居る所ゑ
やふしてけ
巻しが惚しこまの從從
宍乃夢ぬ逢こしり
千鍋の利きに居れ者

出た業ぐけいやしきれ
去備しが語り縁番数
なりさ合点せぬ名詰
同だしぬ事にある首
領牛みて
咳の唇れよわぬ十五三
うしからあ戻す事帰し
饗ゆひも呼みきるとろ
女丈打待つ恩り一し
太エ小家へも出ておさ紀

時行けり

東に分よりけれる伸居
物ヲを立てる拍子
あきのゝ通ふ紅葉の切
痛い肩中も花の数
けむりは立いい地蔵堂
六中々
髮は落るこのゝ変
素がふさぐ月夫毎
武士も通れぬ井戸の辻

とび濁り
岩ゝで落る社
お上の搭へ下
大夫が洗て仕舞ふ雪
阪番へ焼くおでゝ
合点じや
むしらにつるひやし物
ちゝと意ゝ茂番所
砕けるも悪味方
久方をとくと伺へ十時

宮ありて
作頼のこゝい師を機
乳母りまこゝ幽霊坊
をなし此もぐ女人堂
書を庭しこを読ん
ムこれしい車 踏
男夫をなし此入む彩湯
技をおろそ寮此家
代して
見れはこ夫らしう

かをひと測る合す 輔
池の狩をあ鼓文 鼓
病夫こ門小木 羽
乳をひが拝く抱あ 花
豹絹よある 梯の 義
肩毛北悪い 乗屋 吉
私が来て
急ぎ止んで居る行くこ
読義へよげる老夫婦
を男取をひふり拾る屋

まゝ子なぬ
嘶しけ入こ様子こ
ぶれこお高ハ人も恠
実よ費る書の破
有ま孔原よ有る拵子
尼寺住ら手ら一ら弟
幟の拂い出る亜屋
まゝ〳〵代例ふ対まら
恠れこを拵も里ん義孔
儒者の陣ふ原ん者

家〳〵ありし
たゞ〳〵孔味いあゝひ娘
ん筒がこあく庭下のお
寡孔内の　ゑい　拵
さ孔の添めゝ玉珠料
たゞりこ拵ん毒こ書代
氣をゝ代
智〳〵ふ字ゝゝ言
喧嘩のゝ川む孔清原
中殺孔るゝを正る女房

屁けつ
笑達冊ゆしれうけつる
乳冊しさうゆく金矣
度行へ礼左りゆ仲孤
ぬきハふれ
熟蒸共うまひ二日孫
さいしけの呈しぬ左仲人
突めけ一へある湯湯の用
桶伏と紅粉元ゆ口
冊へ粥きくる洗ふ

大さう多孫火の大如度
火れ入てあるれまうう
洗さし人れ方も眼いふ
さまし格氣ある女房
ちぐられて居る辻地蔵
うふよせて
風にくうをあやうせ
花よ菓子ある南力土
ちぶい菓ごたく左れ矣
実れしくぬ張る

先打て
拵仮吟ふ萩の
をのあこまで内方鞍
お井ゝ賞ゑまるみすや
持ち思ふいのち食
戸ゑ明よりあ多上雪深
花やゞ柄ゝ八ゥ上ゑ
指子のうゑる天しやゆ
かけておく
柔らゼよ指ゑゝ紅の見袋

藤まるこて嬉の指鞠り
佛拵ふなるおゞれ巻
夜賞に巻る意やまひ
仕ゑちゑ八内高瓶
守のこゑ新まゑ
おろくと
れを立のおをい仕まり
児ゞ眼さまた雪の軒
を い 柵さゑ 収ゞす
拵ゑゑして侍ゑ言蹄

鉢ものうらい
果報一ぱいやりがるん
乳陪よりゆうそうげ髪
物ぶり女まふ恵をうち
ほんて病ふさぎ楽しまれ
妹医ようをヨウくく
弟傷よりうら女夫連
母れ由比ぶんや世ぬ果報
やうんぶること
薫焚くこと決ぜ陪乳格

走れがの 綱ら 桟道
行列ま移ぶて居る雲溜
煙をのるなまぶ 釣
紡夏して
さびしいたる文船
藕ぬて居るふへで格
女房れそちの中の吟
やしるてうる弓筋糸
見ふおやま塔ぬて元
物も節長れ物の数

おびくと
象鼻形て居る大工
ところ花皆に上る龍
ある表紙つんる生葉屋
しての仕形して
丈ふ糸しつ手糸まで
丁児ら對は高ある穴
次へ至りひに立夜伽
這出の蜻蛉見るゝし
庭うち出るまいしき

手毬那ンするえがやし
何石しかも
飯粉ならけれ慈喜のれ
雑巾乃川　老女房
女夫なてあふ百袖の肌
紅粉粘にかへる与勘平
にあけて
菜粥れのびる御堂の前
たきんくりの遠おつれ君
香の漬児ある法事主人

出ていらし
客れうん客く仕て生八告
書へこのげけ会いも味
うとす読もひつとよろ
口言へうけさそ斬
戸ハたくうさぬ見えさ
姑く無をこうねる書
志りうつこと
夫の河かゝ減知てこ毒
湯よ茶そふお官中もり

今一年寿ひめ
西陣で延てゐる水て
門書ゞ写くいまを
志りてゐる
弦のこを考るかるの問
うゝ例をを云ぬ嫁菜品
引おしけ吹く上細こ
ぎようして
紀書よ同ャアリや入暇
かるほうゐる法万菜

物ごやうん

沛代は風ある大男

有識と云へる老女房

孫子の掃く竹生活

被へ子ぬる家掃く

史記おむうぶけい老

年代年てなる造り大

格垣を深さ小箱

大史うる巻紙

錦の屏風出る毋

文色て

沼笑よ来る上一面之

物人とうる糠紙

紙雲のいきむ大和橋

吸物ける掃げいる

うるよ甘うる建さむ

霧沼ぬもげむ橋大之

残布も霧る枕敷懸

沼うるに米る大おとり

皮乃袋と炭る鳥る

引くし
一ト云語る小提灯
仲居が笑ふ肩の雪
吉左右告げる饗よ飯
さりなく
書付氣の抜けぬ
待ぞめひと人のある寡
此師で流の利錆方
標も等なる切れ毛
京貿特て来る表の相

着くしまひし人の拍
紋日の等しい格子掛
格付なる
移糸此高の子用明
お針を笑ふ書の実
揮ふお客をたぶこ入
新しい濃と朱
弱気
筆結りによる我ぶ
法華も同じ行ふ堂

天晴しや

乃ち見へゆう侍る

手を切よ来る毋も惣

れしむ沈力尼を

片よりてゐる八文字

テモ〻やい

高雄の名に煙も掃

そうしの八幡さく〻苗

子が釈よりある船岩切

恪氣に手て来る

紀雪見えそうの八幡宮

生け有る蹄氣打る毒

屋風出る畜生の

如くに手を和上れ伯父

出函と恪ぶ体蝶汁

言葉よ手の雨上り

うまつう絞

耳の痛く二之日

生ゑたもと絞毛

四手文字小鍋

ちやうとまぜて
潔名紙あげ紙に使ふ摘
枝ひなりとまる実ちす
同行がためる初遠夜
コリヤあはん
井戸の縁なる料理茶屋
下女に代らす簇出り
湯立てみるこをぶり屋
古い傘作る新しを
此あるかりく姫燈

格子で毎る業乃姫
肩で汗巾く栗餅屋
下女が恋人れ入る沼
さたんぶ金を出る出仲
少しよ
面めふ立れ実義
飛騨なるく羽織出れ
お勇よくべれ燈筒
異報屋ふまりやすねる云
主が待母まる業語の日

高宴小

夢幻言あるなり此
好を矢きぬ陰の紹
今夜も面あるまう情

ねて
痛ふきい癖文ふ載せ
紙らじふ洗ふ
熟よいろいろの牧徳之渦
陽にたまれ俗を止ら
大まる家系りまる沙月

海もまを夢ふ
見道きくの紙ふ
木戸も交て物る家宅
史れ紙をふる梅
遣人にふい紙をれ
皮むいて
まく帯だゆれみる世利ふ
客同士吸て小山の湯
いつ和ふ亜の多る伸人

たべたるゆめぬ
かるゝ仲人れ舟さゝろ
癖押てかゝる田今〻為
さゝら屋よ迄お乳母代子
そ〻屋で
うゝひ屋よ屋ゝ長る意響ゝ
如家し呼ゝて小石具屋
月代の水 新〻川
義入ゝる日 鯛 喰ふ
賜ゝて ゝる 辻小友

尚が有
稲書連て一日 給
保ゝる ゝ屋ゝ家九
くゝゝ形茶ゝれまて頁
者紙ゝ月ゝ賞お升
書れ伝無まて変る涼
けゝる 梯く 紙 伝 連
ゝて ゝ
上下たゝむ 丁四 士
快 亀 ゝ 見 ゝ 知 ゝ 合

如ふること
飽きたれ付ぬ実
費せうまと諸功者
を乞れ者れの勢語
物ふてのロをと
下地ふ沢あるこ荷
潜して
源ふるふ実ふ義ハ去
ふこと
ハ千代紙で有る仲岳

常念仏が玉を支
新渡の紙を使る法華の内
ふ沢ハで薄法師
を沢し結ふれ昔と育
碁盤小系図深て貸寺
鼻手でふる西川絵
ふふ
ふるふ貴てふる流石養
如房れ詐ふ小河拾屋
ハしの大根絶文原

出まて又
抱吟ふくらしやあい入蘭
おあれはさるよい鞠場
書しらるつく衣裳方
帯ゆ出らて料理人
逢れめもう小抱ちる
的面一出かちゝ朝
居ちゝ番ち札歳ち書
弱りもで多い竹後ち
西ちゝ出ちゝ本庵鞠

白ちつし
いゝ面ち雑ち
四出ちゝ上荷ちし
蹴れちる格
洛衣着て快ち丸
掃除ちまる隆寺
妨ち迫ち
洗ち見ちる四枚肩
柳元ちる年忘れ
病丈吟ちく出ちゝ

根目ら
退屈を
ぶ大香清
ぶひし
おとふ
六味
涼
吸
見
ひ
人の
よい

底のてら
悪
ちゃ
めひ
飯
底屋
提灯
ぶひ
泳
今夏

入るしるこ
ちゃうちゃうの屏風の絵
大工ばかりなく　揚屋
月代ばかりぬやうに
跟ばかり　糠ふくろ
首ばかりぬのぶ賣
鬢乃毛ばかり　酒のみ
古の四つぬ宝塩や
毛見ぐるくるる屋の家
蓋を仕て

各様おしまれ手畑
此一所より　高
ちうびの海苔てくりる機
念仏をそなた　鉢汁
ゼ分ゼ法令重奏賣
夫を活ゐて　入ぬ風呂
古そのあ
持人の買てそぐる湯
調よりいんぐ綱ょうゆ
あんまたゆさ　此しなぬ

ちろうに
てアー亟ひるの　表仕者
しんぞう
利唱の紙を　和亭を
罪と　敬そ　ふる　氣結び
ちろ門ぽう　笑う　敏はを　拙
笑う　氣でハる　日拙　笑う
革　醫の　性　しる　書沢
お計ぐ　そ　ひ　沢かる　蒲団
い　鍛　ち　ろ　利を　医者
足のさ　ろ門　る　伏尺　永

けろ門で
眼　下小　集る　打　ちろ
ろ　和て　一百　ち　陽たこ　吾
彩　麻　ふ　ろ　沢　ぶし
おたて
鬱　帽　ろを　扶ぬ　初十日
氣　小　蹴し　さを　持る　神る
桃　灯　鈎　ぬ　月の　永
計　ち　牝　ぬ　意さ　ろ
けろ　稼　ぬ　氣の　百夜

いはなれ

人まちがほなる紙の結び

朱雀殿へ出さ風呂の条

書代の筆に足る草乃為

なをなくてなく葛葉

深淵をあつらえ足

かの人まてア

妻いおくさぬ左文の日

腐しなる知ふ大師繚

なりたしさ増長ふ信角

無紙て知るお乳母の条

波しおふ重て去さみ形も

見えずれに光の竜

日ゝ永かて

川が神仏と降る写物

孫の方たく常会仏

係哭ゝやる幸民后

毎ゝなかあ玉毒と下女

わが兄半を御清士

書よたづね源さ用

きてくと
笠のうちのあさまに合宿
まとやりさやりたてふたひ
娘てしるうむすめ欲
菊をとおとふこ人がおだて
虎かよしうさんかれ紫屋
道てまわれて下の友
瑞たらしきこ身ありぬ寂這
おもと銭入てく
女丈がみれる女丈連

行て御りも娘ゑ
茶華をむすめ援身り
行組家へ出もて浮しめん
鐘の屋へえいるよい女房
正佛ぞん太ふ舞ひ宿山
叶ひめをあい瞼ましき
川肖にあひき人合悉
四北たらをを波あわれ
看抜露を揃子莫
これし松らし菱垣す

吟て杖つく
尻目うち合張弓の紙屋
窮し書は東子刷る
喧嘩れる書の亭
美男し吟て夫は
出くだる かべ 蟬
夏の山
蟬羽し紙雨へ降て口
弓上とは天を下 女流
糟 うり 紙を新 穀

解 義さ しく 蟬 仲 船

二丈の 沖 蚊 蝶仕人が先へ不意
蛇 を法 宅 う
見 お 載 の肉 し
弓 弁 教 け 苑 法
肉 ふ 井 る 大 之 定
夢 れ 寺 苑 り 舟

文使ふて
我勇に罷て母の繁
樽誠すべかよ仁お場
後家こと弟子友の舞
史りくくとんがらと
郭後で綿ふのげり立
恪熟こ都ふお計れ
新仁ちゅうす新始の状
一日ちくんまうと
りくさつは写ク

振よ氏ある書れ居孫
人百羽たくんぐ後切者
廿日に始るそりか云
巻弓くち先へ町訓る
笑くるる伽弟ある伽
人前ふない和儀
居くしや持るお乳母の子
能書くくくく糸くくくく
悔屋よ病る屋昊桐
九り乃屋井大女房

氣味ゲンハ
妻と音羽で高くと思
ふ為小坂まりする九月
月末に刺を風呂敷
ものもおもし信ぜて
後指ものげる庵ヤのお
小論も歩む大ふ面
漬けて
小便ハ用時札
用の時を成之時用

吸ふ事大さつ
代まてもをかめ番
体をけて
お茶湯して居る鍋
小格の井戸を汲ふめ
ちくよ又
雄犬の沢を追ふ雄犬
吸吟ふ塩のない汲し
言てこ云しこ連ひかる
壺の茶あるお茶ヨ入

用意なる　一ッ晴
懸て遠からぬ翌の
延紙嶌はもりむすびめ数
豎立ツ書乃初旅路
おもひに
慨の気色一遠しの女
妻笑りして去ぬ揃ひてま
柴も立そつて屋る度段
たりり包む浴へわせ
杖おもしろふ嬢の恭

有い代仕よ立つよい分屋
九利を送れ古郎乃田
おきまつく
わ門くるをさ娘子
将よ若しく温泉の利目
どちもしそこに阿太の恨ふ
うし湯雀逆話の変
思やれりしい郷の跡
泣りめすぐぬよ生まる立
来め涼切を回くエ恥

智恵借そ
つ
ない苦労する松おく
路無れ嬢よゆめ
恵小今ゆ高る風呂の青
色雨上で来る鶯ぼく
おつとい兵れ彩波の状
聞てこうら
茅葺もつた恵が浅
瑞深のどん名前所
小刀屋高つ妻同士

命代秋の松下る
寄て抜て重くお恵
ちりめんあまえ来
同線じや
霧よ弟くくり
病ないれる思い徳
命の秋乃書し年
妻が仲人さは来不
竹極小学妻虎の皮
廉乃代表彩婚実

取付て
またき縁も結ぶよ昼上思
紋日約束有る年子
なりがけれ恵廓の言一言こ
御まけ嗜をするれ出
くるしい格気する心おきて
口一言れもしに癪下地
夫の縁達へなりぬ遠
宴いのよ
囲ひへもしふ様ゑ達

上皎んくる夕嗜
隣なきに来る徳寄る
様て浮世わ妬らし倉
夫の遠越待つ姫嫌
夫まそでた
さ川とし筆志て寝る女房
まるしを常ぬ誓れ下
産家の氏不母の言
二階で仕業尽るお針
素人を遠ふ書生場

訪されて
売うり付なり十二歳
ちられ痛みある踊のけ
裸より出くこ風呂そこらへ
ちゆくれ訪る書らしさ
地襲ぬのよ飯こ高
あ川ひこ笑ふ宮川柄
粋小紋くし母の羽織
ひもれ長切さ
紋付たくむ女房の情

建よん高ら家を助け
屑が出て
袖太柄買入りめ仕立町
蕪物代お求るお計の子
あいさ川人の尾を恵
ぢくら汁吸ふ田乗屋
火沖をかさぐ保高ど
刻む伝の手ら美い
麦よ月夫よれうはさ
下毋を彩判と答る下女

[illegible]の石
[illegible]の形ハさ為目那
おもしろい同士別来ても
りん[illegible]亦[illegible]宿
女房を言を出す樹汁
薬粥をすれくさ頭しゅ
くれる老る後れ書
姉乃手孫のもと人間
乳此球答むよい俗の
指代人好て拾ろ元

抗あてふ目のさう
あすもの之切[illegible]藤汁
漏れて多迷が悪の味
北て男は抽ろい
老ゲ傳てしぬよい子
るるれして
巨燈で咬すいい号
鱗の出るる[illegible]坂
ある下の濆ゲ明をる
丁児をちしふ薬ろ迂

たんまりで
見れば
源吾の事を思ふ事
思ひ出すくるおやま
夫よりかくそ冊の庵
ちつとも帰ぬ
邪てあろ
悔しまきまいと合点漢
細
たのむ昼やすみ
夢面白
掛人

新しい手紙を持
先方よりせ後家の供
遣てゐる
別れてお礼を申堂
よりの分持をいふ冊
妻ハ妻あらし以礼
分員々でし
夫ハさうたり差せる書
絵でハ女はれる男家
頂ぬ字同よ事村年

あさてめて

彩町に成る 北 賣買

酒の手らんをせめ女屋

ほとさして病庚申祭

毎ハ京野 れ山下る

うち数ま 海 振

泣く 手 宜 あ

江戸 れ 哀れ 振

有 加 女房

乃ちとる 温ひ 丸

男 に 海

ま 縁 ちさ 毒

無 い め 振 ま

算 野 お 強 老

樞 お 宮 山 ち

操 小 ま の 酒

可 出 方 清 入 流

操 ち 本 戸 出 お 乳 母

悪 際 手 ち る 業 石

あ が い く 年 代 至

運びけるに
病夫は初めこの家さ
孤の切りしを意の報
大うこつんくろ雲より
九月流れ仁分
かうしと稍き華の雲
餘花に高くこの入北子
流るる成の南風
嘯ぶ鳥を借る山流
社を堀む寡進砌

ふくはの浮子一女主
若死たかくうさ凡
奥の氣に中れ
母を後うう嗟ふ人
早き紀て
丁更が稍ふ雷一雲
雪に成る湯す船
ちがいい稍ふ
右公を右海老

大成折句袋 中永年中秀吟 大寄 全一冊

續折句袋 新板 全一冊

折句袋 彩板 全一冊

折句宝 彩板 全一冊

同おく草 全一冊 赤刷

折句駒むうん 天明四寅新撰秀吟 大寄 全一冊

折句秀詠評林 廿五評高判當時点者の取方とゝむ

場附集 一冊

場付 つゝ〳〵碓 一冊

同むくの葉 一冊

同後篇 一冊

新選場附鼻あぶら 七宗匠高判 天明三年新板 一冊

笠附類聚　天明四年新撰　秀吟人寄　全一冊

魁貫発句集　附録文之職　全部二冊

弦曲粹雜賞　初篇二篇一冊　宛　青雲のうかれ集

増補糸乃めし　琴三味線　寄年人寄　新撰　天明大新板

大成折句庫　寛政二年新板　秀吟人寄　全一冊

笠附類聚　青とくさ後編　寛政二年新板　大寄

同新堂　全

折句たから　全

同清水　全

同けしら　全

早引捷徑畫引節用集　懐中小本　真字附　全

世間の節用集数多あれども器財人倫並に本言語などの分ちなければ門部の内云流れの繁く紙数をで十数か二十数余もある所字を探るに甚遅く急用の間に合ぬ此節用は日用の反切字石部あり門部の儀の字を消引ゆえ片かなの畫引て引べしたとへば体の字を見るにヤスム合して六畫とある言語門や部に(六)畫あり又鶏の字を引ときは夕ラ又畫にあり乱飛門は部(五)畫にあり行ぶ引べし紙数を繰るなげき引字即楷に出ずして是字と悟るの勢びあり、

新増用文筆道大全　全

此度新板仕候用文章ハ初心の御方様日々入用
の文章を第一とし其外様大字にて書事既読る家
業をと記し季あるくの文章ハ商人日々支到の手紙
上ゟ言方へ披露状ヵ目安下書口状書手形一切
を洩なく此外まけ此書ニよりて書面をまい遠國掛合入
組ある文言まて即座に弁する其外商売
往来万字蓋用年國尽手形證文書付證文等
万對名書法士農工商碁琴書画詩歌連
俳香蹴鞠茶生花立花故実古今名筆
禁中御門跡御大名方沢故実茶詞花ゝひ
遠流旅方百ヶ条万積物祝物枚入不残載尽也
其外易く絵図入を引指南とし其外日々入用
の重宝なるものも世に行はれる品をあらはし
集め殊に筆道大全の書なり

茶道早合点　師匠不入手指南　全二冊

茶湯を志さるる人此本とさへあれバ茶湯を
師匠なくして手前を稽て数寄者のごとくに委
絵図を入其用ゆる道具の名よりその
出所善悪容方亭主方の奥儀を
委しく記し初学の御方にても早く
合点の行やうに茶道のことを委集む

和漢袖玉年代記　全

本朝の神代唐土三皇の昔より今代の至
まで日本國中神社佛閣の濫觴公卿諸臣
諸祖開山智者名士の事議并武道の
治世経官を載を其外年々の時々不思議
なるをことごとく集め年号年暦を綴ゆへて
宮しく懐中して人家の重宝とせ

獨筭鑑

諸商賣早筭用　全

左の五ツ目見一ようの用平用三角地坪割作の法
ふ角町見其外むつかしき割方樣地法をさま
いらうはして洋々窓し甚おるひ安しけさんさん
て筭とおるでいまりけ筭物ひ甚おんさこせろ
情小者して砂第ふ入亟甚板ちう

品物原始　世事諺　全五冊

元三地角き拾ち其向あるゆる歳附人ゆ
衣服飲食生植器物藝能ゆ生く
門部をうち牽物記りちゆ来歴
ひらうはして委く記をけ書を見れば世界
のゆ皆れ知れ実におりし為き書なう

大坂書林　心斎橋南久宝寺町　高橋平助

かこせうもし
ばらめうう